

かりん

Kyoto University Yoshida-South Library Bulletin



No.7
2014

目次 CONTENTS

図書館の一年間

巻頭言

περιπατεῖν 林 信夫 01

声

書庫との出会い 中元 洸太 02

戻ってきました 佐伯 直樹 03

知の世界を逍遥する

教養部があった頃 高橋 由典 04

教養教育に想う 川井 秀一 05

オープンで自由な学び 映画、大学、図書館、そしてインターネット 飯吉 透 06

ノンフィクションで知る技術の進化の面白さ 喜多 一 07

国際化、学際化からみた逍遥館への期待 北川 進 08

図書館にないものと公文書館の必要性 伊従 勉 09

自著を語る

イタリアン・セオリー 岡田 温司 10

貨幣と欲望 佐伯 啓思 11

都市を冷やすフラクタル日除け ―面白くなくちゃ科学じゃない― 酒井 敏 12

寄贈図書

吉田南構内各局部教員及び関係者寄贈図書 13

図書館愛称によせて

知の世界を逍遥せよ! 辻 正博 14

グレート・ブックス読書会によせて

矛盾・問い・共感 小林 哲也 15

特別寄稿

光合成をやめた不思議な植物の生活に迫る 末次 健司 16

特別図書紹介 18

図書館の活動 19

人環・総人図書館から吉田南総合図書館への一年間

	行 事 等	情報リテラシー支援
2013年 12月	・ 特別企画「環onで浄瑠璃。」[12/20]	・ あきらめずに15分 文献ハンター くらいいついたらほなさない! ここにない文献が 手に入る方法【ILL講習会】[12/2～6](9人)
2014年 1月	・ お楽しみ企画 新春★三角くじ [1/7] ・ 図書館の名称変更に伴う愛称募集開始 [1/24]	
2月	・ 第42回環on映画会 [2/19]	
3月	・ 視聴覚室の機器を入れ替え ・ 地下電動書庫工事 [3/12～16] ・ キャンパスライフ入門講座ツアー [3/14] ・ OSLリニューアル [3/29～4/3] ・ 愛称「逍遙館」決定 表彰式開催 [3/31]	
4月	・ 5部局による運営体制変更に伴い、図書館名を 「人間・環境学研究科総合人間学部図書館」から 「吉田南総合図書館」へ改称 ・ グレート・ブックスコーナー設置	・ "Library Guide 2014"発行 [4/1] ・ 全学共通教育ガイダンス [4/2～4] ・ 図書館機構スタンプラリー [4/2～25] ・ 吉田南総合図書館ウォークラリー [4/4～25] (241人) ・ としょかんアラカルト [4/15] ・ としょかんアラカルト [4/23]
5月	・ 「グリーンカーテン里親募集」に参加 ・ 第1回吉田南総合図書館協議会 [5/12]	・ 図書館利用について授業で説明 [5/2、5/13] ・ KULINE講習会 検索できなさはじまらない! 15分で京大図書館ことはじめ。[5/12～16](4人)
6月	・ Book Bingo [6/2～8/8] (179人) ・ グレート・ブックス×綴葉 [6/2～8月末] ・ 第1回吉田南総合図書館運営委員会 [6/20] ・ 第1回グレート・ブックス読書会 空気に流されないうための<聖書>入門 [6/27](27人)	・ 何はともあれ論文探し レポート・論文執筆のための15分CiNii講習会 [6/23～26](31人)
7月	・ ブログ「今日も逍遙館」開始 ・ 第2回吉田南総合図書館運営委員会 [7/23] ・ 第2回グレート・ブックス読書会 不条理「異邦人」入門(1回目) [7/29](13人)	・ 卒論・修論執筆応援キャンペーン2014 [7/1～8/8] ・ 手に入らないなんて言わせない! 15分でわかる文献取り寄せトラの巻 【ILL講習会】[7/14～18] (8人)
8月	・ オープンキャンパス [8/7～8] (714人) ・ 蔵書点検 [8/18～19]	・ 研究がとぎめく文献整理の魔法 -RefWorksの使い方- 【文献整理講習会】[8/6] (4人)
9月	・ 第3回グレート・ブックス読書会 不条理「異邦人」入門(2回目) [9/1](8人) ・ グレート・ブックス × Twitter [9/1～11月末] ・ 第2回吉田南総合図書館協議会 [9/30]	・ としょかんアラカルト [9/25]
10月	・ 第3回吉田南総合図書館運営委員会 ※メール審議 ・ グレート・ブックスと私 子規になりきる! 百万遍句会 [10/23](16人) ・ 蔵書のタネ募集します! 気軽にリクエスト・キャンペーン [10/27～11/29]	・ としょかんアラカルト [10/14] ・ 15分でナットク! KULINEから論文検索 [10/20～24] (12人) ・ 15分でシットク! Web of Scienceから論文検索 [10/27～31] (14人) ・ 図書館利用について授業で説明 [10/28]
11月	・ 特別企画「環on de ウード ユーフラテスのほとけ」 [11/26] ・ 男山第二中学校から見学 [11/28]	
12月		・ 15分で習得! 新聞検索講習会 [12/1～5] <予定>
2015年 1～3月		

()内の人数は参加者数

● 名称が「吉田南総合図書館」となりました

2014年4月、当館は従来の大学院人間・環境学研究科・総合人間学部のほか大学院総合生存学館、高等教育研究開発推進センター、国際高等教育院、物質・細胞統合システム拠点の吉田南構内関係5部局の共同運営による図書館として、新たなスタートを切りました。

名称が「人間・環境学研究科総合人間学部図書館」から「吉田南総合図書館」に改称され、愛称は公募により「逍遙館」に決定しました。(p.14に関連記事)



περιπατεῖν

吉田南総合図書館長

林 信夫

HAYASHI Nobuo

ヨーロッパの修道院や教会等を訪れると、特にその中庭に回廊や歩廊が備わっていることが多いことに気づかれる人は多いでしょう。それは、例えばピッティ宮 Palazzo Pitti 等実際の建築物であっていてもありませんが、フラ・アンジェリコの「受胎告知」のような絵画の中にもみられます。また、アルハンブラ宮殿等のイスラム建築や法隆寺等日本の寺院建築でもみることができます。しかも、ポンペイの遺跡や Villa Adriana をみると、古代地中海世界の建築物も同様であったことを確認することができたり、推測することができたりします。

このような回廊や歩廊は、単に通行する場所として、また単に美的観点から設けられたというよりは、思索と結びつくことが多く、古くギリシア・アテナイの郊外や近郊にあったリュケイオンやアカデメイアに想いを致すと、そのことが理解されます。というのは、リュケイオンやアカデメイアにはギムナシオンがあったことが知られていますが、それは、その言葉の元々の意味の身体を鍛えることだけが目指された施設ではなく、講義も行なわれていましたし、またビブリオテーケーと表記の図書館も併設される公共施設だったからです。ここで心身を鍛え学問に勤しんだ者たちを *Λύκειοι περιπατητικοί*、*Ακ'αδημεικοί περιπατητικοί* と呼ぶことがありますが、両者に登場する *περιπατητικοί* という単語の動詞不定形 *περιπατεῖν* は、単に「歩く」というよりも「ぶらぶら歩く」、「一緒に歩く」、「付いて歩く」状態を示しています。特にリュケイオンについては、アリストテレスがギムナシオンで肉体を鍛えた弟子たちと、散歩しながら議論をしたことから、または歩廊を行きつ戻りつしながら哲学を講じたことから、アリストテレスの下に集った者たちが「ぶらぶら歩く者たち(ペリパテーティコイ)」と名付けられたと伝えられています。

さらにここから、リュケイオンという場においてアリストテレスの下で知的活動に携わった人たち、またはその考えをペリパトス派ということは周知の事柄に属しまし

う。この名詞形の *περιπατος* は、単に歩く様を示すだけでなく、プルタルコスやデメトリオス等の文献史料ではむしろ歩廊や回廊、また歩きながらの議論を表現する場面で使われています。このように、心身を鍛えたとともに知に触れ、知に遊ぶ様を示すのが、まさにペリパティン *περιπατεῖν* なのですが、日本でペリパトス派を「逍遙学派」とも翻訳することに現れていますように、ペリパティンは「…歩く」よりは「逍遙する」という訳語がより一層ふさわしいように思われます。というのは、この「逍遙」という言葉には、周知のように、悠々自適に楽しむ様が含まれていますから、アゴラやアレオパゴス等政治を行なうアテナイ中心部から若干離れたリュケイオンで知的活動に携わることを示すにはまさに「逍遙する」がふさわしいからです。

この逍遙を含む館名を愛称に持つものとして、この4月に出発したのが、ここ吉田南総合図書館になります。すでに本館ホームページでもご案内のように、この愛称は、本館が立ち上がるにあたって由来や役割等に想いを致すよう公募され、数多くの応募作品の中から「図書館は、言うなれば「知の世界」を“逍遙”するために存在する施設です。文科・理科の枠組みを超えて、長らく京大生の「知」の基礎を支えてきた人環・総人図書館が新たな時代に羽ばたいてゆくにふさわしい愛称と考えて」応募された辻正博教授(人間・環境学研究科)の手になるものであり、まさに本館にぴったりな愛称といえます。

また逍遙といえば、「逍遙の歌」を思い起こす方もいらっしゃるでしょう。この歌は、黒澤明監督の「我が青春に悔いなし」の挿入歌としても使われたことで、ますます人口に膾炙しました。まさに「知に遊ぶ」様を彷彿とさせます。このような場としての吉田南総合図書館に是非足を運び、知に遊んでいただくことを期待します。

(副学長(法務・コンプライアンス担当)/大学院総合生存学館 特定教授、総合生存学専攻)

書庫との出会い

中元 洸太

NAKAMOTO Kota

私が初めて「人環・総人図書館」(つい去年度まで「吉田南総合図書館」はそう呼ばれていた)を訪れたのは、確か高校2、3年の夏、オープンキャンパスの際だった。馴染みない大学という場所に当惑し、気後れのために志望学部の説明会にさえ行けなかった私は、「折角来たのだからここぐらい見て行こう」と、この図書館を訪れたのであった。それまで図書館と言えば学校の図書館にしか出入りしていなかった私は、開架図書に並ぶ多くの本にいたく感動した覚えがある。一緒に来ていた知り合いに、「ここなら新書は買わずに済みそうだ」などと、偉そうなことも言っていた。当時から私は、決して読書家などではなかったのに。

ところが、いざ大学に入り図書館の利用者となると、徐々に最初の新鮮さがなくなっていく。もっともこれは恐らく至極当然のことなのだろう。はじめはAVコーナーや2Fの閲覧室、自動貸出機等々にいちいち感動していたのだが、一度二度出入りすればそうした感動は薄らいで、馴染んでしまった。もしこうした状況が以後もずっと続いていたら、私の図書館への想いは今とは全く違ったものになっていたかもしれない。

入学から半月ほどして、とある授業で図書館の書庫に潜ることとなった。書庫の存在さえ知らなかった私は最初、「そんなものがあるのか、学生でも入れるんだ」程度にしか思わなかった。しかし荷物を預けあの手すり付きの小さな階段を下りて行くと、眼前の光景に胸がときめいた。暗い部屋の中にずらりと並ぶ蔵書。古書店に入った時のような心地よい匂いがして、開架とは違う落ち着いた雰囲気包まれる気がした。「何だ、ただの書庫じゃないか」と思われる読者もいるだろうが、当時の私にとってはそれほどこの第一印象は大きかったのである。

ただ、附属図書館にも広大な書庫はあるし、書庫に限らずとも「地下の図書館」は教育学部の地下開架図書がある。何が私をここまでこの地下書庫に惹きつけたのかを思うと、この話の続きを思い出さなくてはならない。

地下書庫に入った私は、教授の案内を聞きつつ書庫の

中をあちこち歩き回った。大学の紀要、大量の書籍、全集に新聞。そうしているうちに、青島文庫や謎の木版などのあるエリアに到達したのである。最早触ることさえ躊躇われるような資料が、あちらこちらに。辺りの不思議な雰囲気も相まって、地下が過去に繋がっているかのような感覚さえ覚えた。

今回調べてみると、この図書館の歴史は明治時代の「舎密局」にまで遡り、第三高等学校時代の蔵書約8万冊が受け継がれているのだという。そんな歴史の一端に触れた経験が、私の図書館に対する認識を大きく変えた。図書館は単に、本の貸出を受けるだけの施設ではない。それは図書を保存し公開する営みの中で、生き物のように私の前に立ち現われてくるのだということ、その日私は何となくではあるが知ったのである。

やや書庫のことばかり書いてしまったが、この図書館の取り組みも見逃せない。入口の黒板、ツイッター、今年度開設されたブログ、配布されるパンフレットなど。思えば、私が初めてこの図書館にやってきた時の入館シールも猫の絵が描かれていた。他の図書館がここまでこだわったことをするだろうか。内装や名称が少々変わりつつも、変わらず独特の遊び心や気配りを忘れないこの図書館には、本当に楽しませて頂いている。

こんな何処か針小棒大にさえ聞こえる思い出語りで、読者の失笑を買ってしまうかもしれない。しかし、たまにはこんなナイーブな「声」も良いのではなかろうか。そんな身勝手なことを思いつつ、キーボードを打つ手を止めたいと思う。

(総合人間学部 学部生)



戻ってきました

佐伯 直樹

SAEKI Naoki

学部時代の私にとって「総人図書館」は、そんなに身近なものではありませんでした。一般教養科目の履修を大方1回生のうちに終え、語学以外は経済学部のある本部構内にこもっていたためです。「総人図書館」で勉強したのも1回生の前期試験前に1,2回あるくらいで、あとはほとんど記憶にありません。「総人図書館」といって思いつくのは新書、ハウツー本、そして『地球の歩き方』。小難しい専門的な本は当時よく通っていた経済学部図書室や附属図書館に任せるとして、「総人図書館」は気軽に読める本、役立つ本に出会う場だったのです。特に『地球の歩き方』は長期休みごとに海外渡航を繰り返していた私にとって、本当にありがたいものでした。思い返せば、長期休みの前に新品同然の本を借りてひと夏のお伴にし、そして新学期が始まる頃に少しくたびれた様子の本を返す、そんなことを繰り返していました。「総人図書館」で借りた『地球の歩き方』のおかげで地球上の様々な場所で多くの出会いをしてきました。その中でも円形の空間に上から下まで四方八方びっしりと本が並んでいたストックホルム市立図書館の光景は、今も強く脳裏に焼き付いています。

大学院に進学し、「総人図書館」は私（総合生存学館）の所属図書館になり、貸出冊数も期間も随分と恵まれることになりました*¹。更に名前も「吉田南総合図書館」となり、これまでの私と図書館の関係から大きく変化することになりました。まず、これまで知らなかった図書館の魅力に気がきました。図書館地下の書庫に潜入してみると、1階に並ぶピカピカの本と対照的な古く趣のある本の多さに驚きます。『地球の歩き方』のバックナンバーもたくさんありました。その佇まいからは多くの旅人がこれを使って世界を渡り歩いてきた歴史をひしひしと感じます。共南の地下*²に行ってみると膨大かつ貴重な雑誌の数々に興奮を隠せないこともしばしば。学部時代はこの場所の存在すら知りませんでした。また、図書館のゲートに入ってすぐの新着図書コーナーも最近は頻繁に利用しています。タイトルの気になった本を数冊借りて、ざっと読んで数日後に

返す。幅広いジャンルの知識を得ることができます。

私は現在大学院で、地方から都市へ移動した後、再び都市から地方に戻ってくる人々を主な対象として、人口の還流移動の研究をしています。地方から一旦離れたからこそ地方の何が問題で何が魅力なのかを発見でき、都市での経験を活かして地方で活躍しようと移動した人々と会うことも少なくありません。総人図書館から一旦離れて、専門書籍の並ぶ経済学部図書室を主に使っていた私も似たような思いを持っていたことに気がきました（さすがに少し強引な話の展開ですが……）。吉田南総合図書館は幅広い分野の本が古典から最新刊に至るまで所蔵されている学内有数の図書館です。たとえ訪れる人の専門が経済学でも宇宙工学でも、きっと魅力的な本が見つかることでしょう。学部1回生の頃の専門分野がまだ存在していなかった時ではその大切さが分らなかったのですが、専門分野がはっきりしてきた今だから感じることもなのかもしれません。この図書館に戻ってきて、多くの発見ができました。これからもしばらく、よろしくお願いします。

（大学院総合生存学館 博士一貫課程）

*¹ 当館の貸出冊数と期間は、所属学部、研究科に関わらず身分（学部生、大学院生等）によって異なります。

*² 吉田南総合館南棟地下に、南棟1～6の6つの書庫があります。



Stockholms stadsbibliotek (Stockholm Public Library)
(撮影：佐伯直樹, 2012.3.19)

教養部があった頃

大学院人間・環境学研究科長

高橋 由典

TAKAHASHI Yoshinori

私は1970年に京都大学文学部に入学した。その頃は教養部という部局があり、1、2回生の間は主としてその教養部が提供する授業を受けることになっていた。今の吉田南構内全体が教養部とよばれ、学部とは少しちがった一種独特の雰囲気が漂っていた。

私の場合、3年生になって専門(社会学)の勉強が始まってからも、足繁く教養部に通った。そこに私がコメントやアドバイスをいただきたいと思う先生がおられたからだ。文学部にも指導して下さる先生はむろんおられ、大変お世話になっていたのだが、自分が現在考えていることが真に考えるに値する問題であるかどうかについては、何よりもその教養部の先生のご意見を聞きたかった。論文を書いたり、新たなテーマで勉強を始めたるときには、必ずこのようにしていた記憶がある。このパターンは学部生の頃から大学院を終える頃まで続いた。

今思い返すと、我ながらずいぶん図々しいことをしていたように思う。その先生と私との間には、制度上の関係は一切なかったからだ。教養部は、それぞれの学部に入った学生が一般教育科目の授業を受けるために通過する場所にすぎなかった。専門教育は各学部のものであり、教養部はその場所ではなかったのだ。教養部の教員は固有の指導学生をもたなかった。私が指導を求めて押しかけていた先生は、制度の指示とはまったく無関係に私にコメントやアドバイスを与えて下さっていたわけである。

私のようなことをする学生は、当時かなりたくさんいたのではないと思う。学部が設定したカリキュラムの外に出てしまうこと、すなわち越境することは、当時の学生にとってごく当然のことだった。教養部には自然科学、人文・社会科学、語学を専門とする多彩な教員が揃っていたし、その中には学生にとってとても魅力的な先生もおられたからである。ともかくこういうかたちで、制度上は互いに何の関係もない教員と学生の間で、きわめて質の高い教育が行われていた。この教育は、カリキュラム上は

存在しない教育であったし、大学当局もその存在をまったく把握していない教育であった。それゆえ<制度によらない教育>といっていよい。

このように、教養部という組織と<制度によらない教育>は深く結びついていた。教養部の教員が魅力的であり、かつ教養部教員に固有の指導学生がいない以上、一種の必然として<制度によらない教育>が発生する。他方この<制度によらない教育>は、大学の活気を示す一つの指標とみなしうる。制度の支えをもたない、その限りでまったく自発的な教育が縦横無尽になされている大学は、やはり活気に満ちた大学といっていよいのではないか。とすると、教養部という組織は、その存在自体によって大学に活気をもたらししていた可能性がある。

翻って現在のことを考えてみよう。今の学生諸君の多くは、「越境」と言われても怪訝な顔をするだけだろう。自分の学部のカリキュラムですべての必要が充たされている、なぜわざわざ外に出なくてはならないのか。たしかにその通りだ。カリキュラムは合理的に設計されており、あえて外に出る必要もない。それにかつての教養部のような、固有の指導学生をもたぬ多数の教員を抱えた教育組織も存在していない。教養部をその前身とする人間・環境学研究科も、現在は総合人間学部の学生に対して固有の教育責任を負っている。教員はすべて自学部の学生の教育に忙しいのだ。このような条件下では、越境のポテンシャルは極小化せざるをえない。

だが学術の府としての大学が何によって活気づくかを考えるとき、越境というかたちでの知の探究には、無視しえぬ意義があるように思える。だとすると、教養部時代に何があったかに目を凝らすことには、それなりの意味があることになるだろう。

(大学院人間・環境学研究科 教授、人間社会論講座)

教養教育に想う

大学院総合生存学館長

川井 秀一

KAWAI Shuichi

筆者は京大北部キャンパスの西隣の地に生まれ育ったので、大学は幼い頃からの遊び場であった。理学部植物園でザリガニ釣りなどをして、園丁さんに叱られたのをよく憶えている。京都大学の教養部に通ったのは、すでに45年以上前のことである。教養部では、理系科目を中心に学んだが、文系科目も結構楽しいものであった。教養部時代は時間がふんだんにあり、哲学書であれ、歴史書・文学書であれ、時々に興味をもったものを手当たり次第に読んだ。乱読で、十分消化したとは言いがたいが、何でも自分がおもしろいと感じたもの、楽しいと思えることに時間を使うことができた。自由の学風を満喫し、自主自立を学んだ大学生活であった。

さて、学部教育では教養教育と専門教育が行われているが、20世紀後半には後者の専門教育を重視する政策(中教審答申「大学教育の改善について」1991年)に押され、多くの大学で教養部が廃止された。しかし、21世紀になって、「教養」の大切さが各界から指摘されるようになり、現在、教養教育が再考され始めている。日本学術会議の提言「21世紀の教養と教養教育」(2010年)では、現代社会が抱える問題について合理的かつ適切な解決方法を考え、実行するための基盤となる知識と教養(知性・智恵・実践的能力)を不可欠とし、教養教育を専門教育と対等に位置づけている。本学においても教養部が廃止されて久しいが、2013年に国際高等教育院が新たに設置され、教養教育の再編が行われつつある。

わが国は、地政的な関係からこれまでの歴史を通じてどちらかというと他の世界との深い関与がないまま、独自の文化を築いてきた。このため日本人は「自らを相対化」することが苦手であると考え。過小評価でもなく、過大評価でもない、等身大の自分を客観視することが不得意である。しかし、人、もの、情報のグローバル化は否応なくわれわれを国際社会に巻き込み、異文化と格差のなかでの舵取りを迫られている。地域紛争、経済危機、人口爆発、環境汚染、感染症など、われわれに突きつけられた課題は広域化し、複合化している。他方、地域に根ざした固有性、多様性、文化伝統を重んじる動きは一連のグローバル化の動きに対する反作用、対抗と考えることもできる。これら二つの

動きの調和を図り、社会・経済・文化の変化に適応した構造の変化、新たなパラダイムへの転換が求められているのであろう。

このような時代の曲がり角にあって学術は十分な役割を果たしているだろうか。近年の科学・技術の急激な発展、深化に伴い、個別の専門分野の知識は飛躍的に増加し、先端化して、社会の理解を得ることが難しくなっている。同様に、学術の細分化により相互の関係性もわかりにくくなっている。複雑な社会問題に対して狭い専門分野からのアプローチだけでは限界があるのは、東日本大震災の原発事故でも明らかである。幅広い知を駆使して問題を解きほぐし、課題を発見してその解決法を探り、実践できる統合知、すなわち「教養」が必要な所以である。

筆者の所属する総合生存学館は昨年設置された新しい大学院である。「思修館」を通称としている。思修館は、既存の学術体系を広く俯瞰して、多様な専門分野を束ね再編し、これらを活用して論理的な思考を重ねて統融合することで課題解決型の新たな知、生存知を生み出すことを目標にしている。このため、教養を重視し、その基盤となる教養教育を八思(八つの学問領域)として位置づけている(<http://www.gsais.kyoto-u.ac.jp/>参照)。講義・書物(聞)などを通じて学び、知識・経験を統合した深い思考と探求(思)を基に課題への挑戦、すなわち、実践(修)を含む総合的、創発的な学修により、国際社会の現場で実践するリーダーの育成を目指している。「聞」を中心に体系化された大学にあって総合生存学館は後二者の「思修」を強調している。社会的な課題の解決を主題に据えているので、聞学の世界に留まらず、諸学を活用して課題解決のための方法論を考え編みだし、課題に挑戦する実践を重視しているのである。

教養教育というと伝統的なリベラル・アーツ科目群として単純に捉えられることが多いが、その意義と本質は個別の学問知識をバラバラに広く学ぶことにあるのではなく、相互の関係性を理解し、これらを統合する論理的思考や実践知を鍛えることにあるのではなかろうか。

(大学院総合生存学館 特定教授、総合生存学専攻)

オープンで自由な学び 映画、大学、図書館、そしてインターネット

高等教育研究開発推進センター長

飯吉 透

IYOSHI Toru

若かりし頃、大学受験勉強には全く身が入らず、浪人したものの予備校に行くよりもその当時「名画座」と呼ばれていた格安の映画館（400円程度の入場料で名作映画の三本立てが鑑賞できた）に足繁く通って、ゴダールやフェリーニといった名匠たちから人生について楽しく学ぶことをこよなく愛していた。そのような私が、縁あって入学した東京の大学は、教養学部のみで Liberal Arts に重きをおいたカリキュラムを主としており、当時から見境のない「知のつまみ食い」が大好きだった自分には、至極好適と思われた。どちらかと尋ねられれば、文系よりも理系にやや傾倒気味だったこともあり、理学科物理学専攻学生として大学で最初の一年を過ごしたのであったが、元来、理論的なものよりも実践的・工学的な「目に見えて動くもの」が好きな性分であり、理系の基礎的な授業はそれほど興味深いものに感じられなかった。さらに、当時最も苦手だった英語の集中特訓を初年次に課せられて辟易していたこともあって、さっぱり勉学に身が入らず、さりとて郊外にある大学だったので近所にふらふらと遊びに行けるところもなく、緑に囲まれ広々としたキャンパス内で当て所なく悶々とした日々を過ごしていた。

とは言え、「せっかく大学にいるのだから、何か学ばなければ」という気持ちはそれなりに強かったのだろう。まだインターネット前の時代であった当時は、膨大な知に触れられる場所と言えば、大学図書館しかなかったこともあり、図書館内でよく気ままにぶらぶらしていた。そんなある日、偶然に目にしたのが、教育工学 (educational technology) という新興の学問分野の学術誌だった。どうやら教育工学とは、コンピュータ等のテクノロジーを利用し、システム工学的な考え方で教育を改善していくという謂わば理系と文系が融合された分野らしく、二、三の欧米の学術誌で紹介されていた実践的研究開発の事例等にも大いに興味をそそられた。当時は、国内で

も「マイコンブーム」と呼ばれるようなパーソナルコンピュータの黎明期で、自分は中学生時代から半田ごてを握って「ワンボード・コンピュータ」のキットを組み立てたり、様々なプログラミング言語を独学で学んだりしていた（外国語を学ぶのは大嫌いだったが、何故か機械の言葉を学ぶのは大好きだった）ので、何か応用ができそうだと感じた。不思議なもので、あれだけ英語が嫌いだったのに、気がつけば、当時英語で書かれたものが大半だった教育工学分野の学術誌や専門書を、一生懸命に辞書を片手に読んでワクワクしていた。

とても幸いなことに、同大学の教育学科にはアメリカで博士号を取って帰国された教育工学を専門とされる教授が二人おられた（その御一人である恩師中野照海先生は、京都大学・大学院で教育心理を学ばれた）ので、私は早速先生がたの研究室を訪ねて相談した。すると、すぐに「それならば、ここに来て学びなさい」と仰ってくださったので、躊躇することもなく教育学科に転科を決めた。その後、知的興奮に溢れ充実した大学生生活を経て同大大学院へ進学し、米国へ留学して博士号を取り、十数年間アメリカのカーネギー教育振興財団や大学で働いた後、三年ほど前に帰国し京大に赴任した。

ここ十数年に渡って私が注力しているのは、オープンエデュケーションと呼ばれるインターネット等を利用し、より良い教育をより多くの人々に享受してもらう謂わば「21世紀の知の革命」の推進で、最近では本学も先端的に取り組んでいるMOOC (Massive Open Online Course) やオープンコースウェア等の動きが顕著だ。誰もが自由に何でも学ぶことができる世界を実現することが私のライフワークであり、教育を通じて個人の可能性は最大限に伸ばされると信じて止まない私に、知の世界を逍遥する喜びを教えてくれた原点は、間違いなく図書館にある。

（理事補（教育担当）／ 高等教育研究開発推進センター 教授）

ノンフィクションで知る技術の進化の面白さ

国際高等教育院副院長

喜多 一

KITA Hajime

ものを作ることが好きで本学の工学部の電気系教室に入学しました(当時は電気工学、電気工学第二、電子工学の3学科が一体運営されており現在の電気電子工学科とほぼ同じです)。入学後にシステム工学という分野への関心が強くなり、またそのまま大学に残って教員になってしまったので、実際に企業で人々に使ってもらう製品を作る経験をしないままなのですが、技術について書かれたノンフィクション作品は今でも良く読むジャンルの一つです。

このような作品を通じて知ることができるのは、さまざまな技術開発において難しい技術的目標をどのように達成したのかとか、技術開発は往々に現象の科学的理解に先行することがあるのですが、科学的理解が不足した状況での苦闘の様子などで、興味深い話が少なくありません。例えばわが国の例で言えば零式戦闘機や東海道新幹線の開発などはそれ自体が大変、面白い内容です。また、戦前の航空機の技術者が、戦後、航空機の研究開発を禁じられたことにより、鉄道に転身したことが新幹線の開発につながったことなど相互の関係性も知ることができます。日本の歴史的な事情が世界的な高速鉄道化への道を開いたことは歴史としての不思議さも感じさせられます。

少し古い時代の技術ですと、19世紀から20世紀に変わるあたり、丁度、シャーロック・ホームズがロンドンで活躍した時代です。ホームズのストーリーでは電信が大活躍しますが、この時代の情報通信技術にも面白い話題がいろいろあります。

電気を使って通信をする、というのがこのころに始まりますが、最初は文字情報を送る電信でスタートし、その後は、音声を送る電話に取って代わられます。現代は再び、文字情報(そのほか、音声でも画像でも)を送るインターネットが復活しているのですが、電信が普及した時代にインターネットの黎明期と同じようなネットワークの使い方が生じていたりするのです。

また、コンピュータが実用的になるのは電子技術が利用可能になる20世紀の中ごろなのですが、機械仕掛けでプログラムできるコンピュータを作ろうとしたチャールズ・

バベッジの着想や失敗の話なども興味深いものです。

科学の歴史は理科教育の中で折に触れて学ぶと思いますが、技術の歴史は残念ながらあまり学校教育では紹介されません。興味のある方は、ぜひ本を探して学ばれると面白いかと思いますし、NHKが作成した「プロジェクト X」シリーズ*1 などビデオ資料と併せて勉強されてもいいかもしれません。

ノンフィクション作品を読んでいて感じることは、描かれている内容の面白さとともに、対象を丹念に調査し、技術やその時代背景を理解して、なおかつ一般の方にわかるような形で読み応えのある作品として描いてゆく著者の力量と対象に対する問題意識の高さです。そこには小説などのフィクションとは異なる感銘を受けます。

自分の専門に近い分野ですと技術的な内容がわかっている分だけ、「よくぞ取り上げてくれた」とか「うまく書いているなあ」とかいう感想を抱きながら読むことがありますし、技術そのものは知っていても、それが生み出された経緯までは知らないことも多く、「そうだったのか」ということもあります。そして、感銘を受けた著者については、他にどのような作品を書いているのだろうか、ということで作品を通じて他の技術分野を学ぶ契機にもなったりします。

ぜひ、皆さんもこのような学びを試みてください。

情報通信技術史について面白いと思った本を2冊取り上げておきます。

1. トム・スタンダーズ著、服部桂訳：ヴィクトリア朝時代のインターネット、NTT出版 (2011)*2
2. ジェイムズ・グリック著、楡井浩一訳：インフォメーション：情報技術の人類史、新潮社 (2013)*3

(国際高等教育院 教授)

*1 当館視聴覚室に所蔵あり「プロジェクトX」でまとめて配架

*2 当館所蔵あり 1F 和書 694.2[B]1 その他附図、工吉田電気が所蔵

*3 当館所蔵あり 1F 和書 007.2[I]1 その他附図が所蔵

国際化、学際化からみた逍遥館への期待

物質-細胞統合システム拠点長

北川 進

KITAGAWA Susumu

本年4月から装いを新たに吉田南総合図書館（愛称逍遥館）が発足しました。第三高等学校時代からの知の集積を受け継ぎ、グローバル時代に相応しい、新しい図書館として大いに期待しています。

私は物質-細胞統合システム拠点 (Institute for Integrated Cell-Material Sciences、通称iCeMS) の拠点長 (研究所長) をしています。iCeMSは平成19 (2007) 年に文部科学省の肝いりで設置された研究所であり、「世界から目に見える国際研究拠点の形成」を義務付けられています。みなさんも世界の著名な研究所、たとえばドイツのマックスプランク研究所やカーネギーメロン大学のロボティクス研究所などを知っているでしょう。日本では非常に優れた研究を行っている研究者は多いのですが、研究所 (さらには大学も) としての知名度は極めて低いままになっています。このため、世界から優秀な人材を集め、卓越した研究を行い、世界に人材を輩出する頭脳循環が喫緊の課題となっています。この課題達成に向けて設置されたのが世界トップレベル研究拠点 (World Premier International Research Center) であり、iCeMSを含めて全国で9つ設置されています。世界の研究拠点ですから、iCeMSでは現在約190人の研究者のうち30%は外国人であり、公用語は英語になっており、会議やシンポジウムなどはすべて英語でなされます。グローバル化は避けられないので、若い皆さんはちょっとくらい英会話ができるくらいではダメで、ディベートができなくてはなりません。

電話器やテレビの普及は15% (クリティカルマス) を超えると急激に普及します。国際化も同様でiCeMSでもここ数年で急激に国際化が進みました。大学全体でも留学生や外国人数員数をクリティカルマスを超えるようにしなくては真に国際化はできないと思います。この点で京大の進める国際戦略に大いに期待しています。

WPI拠点では、最先端の研究、学際融合研究、国際化、システム改革の4つのミッションがありますが、とりわけ

学際融合研究の推進が重要視されてきました。個々の科学技術が一定のレベルに達すると何らかのブレークスルーが求められます。このブレークスルーの手段の一つに学際融合研究があります。たとえばエレクトロニクス (電子工学)、インフォマティクス (情報学)、メカニクス (機械工学)、マテリアルサイエンス (材料科学、特にセンサー材料学) などの融合によってロボティクスという新しい研究領域へのブレークスルーが生まれました。しかし、学際融合研究は言うはたやすいですが、実際に研究し成果を出そうとすると大変難しいものです。

iCeMSでは物質と細胞の学際融合研究、とりわけ「細胞を制御する材料」や「細胞機能に触発された機能材料」を中心に研究を進めています。ベースとなる既存の分野としては細胞生物学、材料科学 (とりわけ化学)、物理学が関係します。教授クラスの研究者にはこれらのすべての分野に精通した人がいないし、また年齢が高くなるにつれて勉強しようにも新しいことについて行けない。若い皆さん (特に1、2回生) は可能な限り幅広い分野 (理工系の学生なら人文社会科学の分野も含めて) の学習を可能な限り深くしておくべきだと思います。レポート提出の際にコピペではなく、深く考えることが必要です。

国際化、学際化についてiCeMSの現状の紹介をさせていただきましたが、新しい「逍遥館」がこれらの課題も含めて新しい図書館としてどのように新しい時代に対応して行くのか、若い人も含めて議論し、「逍遥館」を育て上げていく必要があると思います。

(物質-細胞統合システム拠点 教授)

図書館にないものと公文書館の必要性

伊從 勉

IYORI Tsutomu

日頃、都市政策の歴史的展開を研究していると、どの都市であれ、個別的な政策の立案と決定の過程を調べる必要が生じる。政策の大きな流れは、過去のことであれば事前に図書館に所蔵される市史や県史などの通史や研究書の記述が一応参考になるが、それはひとつの見方の提示であるから、鵜呑みにせず、次に挙げるような第一次資料の確認に、現場に向くことになる。

まずは、政策立案から議会への上程過程を調べるため、行政府部内の起案書や決定文書の有無を調べるだろう。行政が組織した委員会や審議会があれば、議事録の閲覧も必要になる。次に、市会審議の過程を市会議事録や委員会議事録で調べることになる。そして、過去の問題ならば当時の新聞や雑誌記事で、どのように報道され論じられていたかを調べる必要もある。そして、以上の探索で不十分なところがあれば、現役あるいは元行政官や、議会審議に当たった現役あるいは元議員らを探して、ヒアリングをすることも必要になるだろう。

以上を研究者個人で行うには膨大な作業となるが、2年から3年をかけて学部やゼミなどで共同研究プログラムを組み探索してみると、短期間に政策策定過程の特性を共有できる。それは行政の政策パンフレットとは大いに異なる地方政治のセルフ・ポートレートになる。また、市史や市政史にまとめられている記述が、どのような取捨選択をして書かれているか、あるいは他の読み方もできることが理解できるようになる。しかし、以上は近年の自治事務についての場合である。

1999年に地方分権一括法が公布される以前、実に多くの国政事務が地方庁に委託されていた。国政事務であった期間（1919年から1999年まで）の長い都市計画行政の場合、上記の方法でことの全貌を把握できるかというと、それは話が違う。

1968年まで都市計画の決定権限は内務大臣もしくは建設大臣にあって、府県知事・市町村長は都市計画事業執行の国の機関であった。都市計画の策定は国の事務だから、負担が強制される財政審議以外市町村議会

にかけられることはない。府県に置かれた国の出先機関である都市計画地方委員会、戦後は同審議会が、内務省（建設省）が策定した都市計画原案や同事業案を審議し、その報告に基づき内務大臣が閣議にかけ認可を受け、内務省（建設省）告示によって地方庁で公告した。

地方庁の吏員や技師が、地方委員会の監督下、あるいは内務省の指導の下、確かに都市計画の素案は準備する。しかし、その案は、府県の査察と副申を添えて内務省に送られ、検閲と修正を経て地方委員会に議案として戻ってくる。市会の議事ではないので、市中で問題になる可能性は常にあった。市町村吏員や技師は国の事務である都市計画に動員されていたのである（官制第11条）。

さて、問題は都市計画行政文書の検索である。地元の行政庁で歴代の行政文書を探せばよいと思うだろう。ところが残っていない場合がほとんどである。素案である地方庁文書は府県の地方委員会でチェックを受け、内務省都市計画課でさらに検閲と修正を受け文書番号が与えられ、初めて正式文書として内務省の簿冊にファイルされた。

したがって、戦前の都市計画であれば内務省暦年編纂録を閲覧しに東京の国立公文書館に向く必要がある。京都府行政文書には、内務省との往復文書に付随した市町村文書が残されているのである。当該市町村には、政策の概要以外系統的な公文書のアーカイブが存在しない。これが国家事務・都市計画文書の保存の実情である。

日本の戦後史の研究者が米国の公文書館に足を運ばなくてはならないように、日本の地方都市の都市改造の研究者も国立公文書館に足を運ぶ現実には、日本の行政文書保存の特徴、つまり中央集権と行政権限が巨大で不透明であることを証言し続けている。

さらに、それ以上の問題がある。戦後地方自治の行政文書の保存と公開が、以上にみた戦前の集権的な内務省文書保存に比べると、驚くほど劣悪な現実であり、市町村公文書館の不在である。

（大学院人間・環境学研究科 教授、文化・地域環境論講座）

イタリアン・セオリー

中央公論新社, 2014年2月

(中公叢書)

ISBN: 9784120045912

岡田 温司

OKADA Atsushi

現代思想といえばフランス、と思っているあなた、それはちょっと早計ですよ。料理やファッションだけではない、哲学や美学の思想においても、実はいまイタリアがとても熱いのだ。ほとんどの著書が世界中の言語に翻訳されて読まれているジョルジョ・アガンベンはその雄。だがもちろん彼だけではない。

これまでの「フレンチ・セオリー」に対して新たに「イタリアン・セオリー」が台頭しつつある。なぜなのか。フランスの大物たちが相次いで世を去ったという外的な要因もあるが、それよりもずっと深いところに原因がある。歴史的にみてイタリアの思想は、他の西欧諸国と違って、国民国家という枠組みに縛られてこなかった。多数の都市国家の林立、ヴァチカン勢力、ヨーロッパ列強の介入等、政治的で宗教的な葛藤の中でイタリアの思想は鍛え上げられてきたのである。

それゆえ今日、政治や経済や文化等あらゆる局面で国民国家の枠組みが事実上、弱体化するか崩壊しつつある状況下にあって、イタリアの思想がにわかにアクチュアリティを帯びてきたのには、それなりの必然性があるのだ。しかもこの国には、芸術や文学、神学や哲学の深くて長い歴史がある。知の領域をダイナミックに横断する博覧強記のアガンベンの仕事が、何よりもその証左である。わたしはこれまで、アガンベンやロベルト・エスポジトをはじめとして、わが国ではあまり知られてこなかったイタリアの現代思想を、半分は使命感のような気持ちもあって、翻訳したり紹介したりしてきた。本書はその作業の中から生まれたもので、『イタリア現代思想への招待』*1(講談社選書メチエ)や『アガンベン読解』*2(平凡社)の姉妹編のようなものでもある。取り上げられている思想家は主に、上記の二人とマッシモ・カッチャーリ、アントニオ・ネグリ、そして優れた建築批評家として知られるマンフレード・タフーリ等である。わたしはここで、イタリアの現代思想のもつアクチュアリティを、「生政治」、神学の「世俗化」、「否定の思考」という三つの

特徴から捉えて考察した。本書を構成する十の章は、これらのいずれかに関わるもので、もちろん複数にまたがるものもある。またこの国の優れた哲学者の多くが美学から出発しているのも、芸術の国ならではの面目躍如といったところだ。

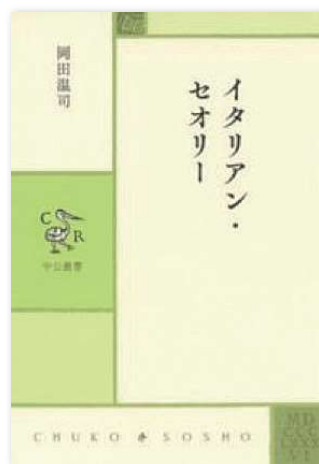
どの章から読んでいただいてもいいのだが、ちょっと宣伝をさせていただくと、第三章の「カテーコンー神学と政治の関」と、第八章「デリダを読むアガンベン、アガンベンを読むデリダ」は、これまでわが国であまり話題にならなかった重要なテーマに初めて本格的にアプローチした、と密かに自負している。特に後者では、デリダがその晩年に繰り広げた強烈なアガンベン批判をきっかけに、二人の屈折した関係を、それぞれの著作から跡づけた。

イタリアの現代思想はもちろんこの国の内部で自足しているものではない。とりわけ、フーコーやドゥルーズ等のフランス現代思想との関係は欠かせない。広く哲学、政治思想、美学・芸術、神学等に関心のある読者の皆さんに手にとってもらえるなら、著者として幸いである。

(大学院人間・環境学研究科 教授, 思想文化論講座)

*1 当館所蔵あり 1F 教員図書 137Ⅱ3 その他附図、教育が所蔵

*2 当館所蔵あり 1F 教員図書 137Ⅱ3 その他附図が所蔵



137
I
4
吉田南

(配置場所: 1F 教員図書)

貨幣と欲望

筑摩書房, 2013年6月

(ちくま学芸文庫 : [サ4-2])

ISBN: 9784480095619

佐伯 啓思

SAEKI Keishi

昔のことである。私は経済学部で三回生であった。最初のゼミの時間、私は一番はじに座っていた。入ってきた教授が、では始めましょうか、と喋りいきなり、「君、貨幣とは何ですか」と私に聞いた。私はまったく何を聞かれているのかわからず、何やらこちらも意味不明の言葉をボソボソとつぶやいただけだった。もちろん、教授は満足せず、では次の人は、と喋り隣の学生を指名したが、当然ながら、彼もまた、意味不明の単語をボソボソ並べただけだった。

どうやら、教授は、別にたいそうなことを聞いたかったわけではなかったようだ。要するに、貨幣とは、現金通貨なのか、預金通貨も含まれるのか、その場合、定期預金はどうなのか、小切手はどうなのか、はたまた金は貨幣なのか、といったことのようにであった。

しかし、いまだにこのときのやり取りは鮮明に覚えている。そして、これが私が経済現象に関心をもったひとつのきっかけであった。教授が聞いたかったことは、何も「貨幣の本質」などではなく、「貨幣の範囲」だったのだが、そんなことが問題になるのは、かなり重要なことなのである。

これが意味していることは、あらかじめ貨幣として決まったものがあるわけではない、ということだ。つまり、貨幣とは、われわれが貨幣と思ったものが貨幣になる、ということなのである。戦後の混乱期では米が貨幣になった。一時、後進国へいけばシャープペンやボールペンが貨幣になる、といわれた。貨幣という確かなものは存在しない。それは、人々の共有の観念として、いわば、人間が操作する象徴的な形式にすぎないのである。

だがそうだとすると、われわれが、そのもとで生活の基盤を委ねている「経済」などというものは、何ともあやういものではないだろうか。何ともあやふやな「貨幣」を求めてわれわれはひたすら悪戦苦闘しているのである。

もともと、「経済」とは、「経国済民」からもわかるように、モノを作って、われわれの生活を確保し、また豊かに

する行為である。しかし、現実の経済は、貨幣という、それ自体はまったく無価値なものに依存して、その貨幣を追い求めているのである。おまけに、この「貨幣を追い求める」というわけのわからない欲望が経済を成長させている。いったい、どうしてこんなことが生じるのだろうか。

こういうことを私は大学院生のころから考えていた。しかし、実は、経済学という学問は、この種の問いにはまったく答えてくれないのである。

とはいえ、かつての偉大な経済学者や社会学者は明らかに、この種の問題を理解していたように私には思われた。アダム・スミスも、マルクスも、ケインズも、マックス・ウェーバーもそうである。

こうした人は、人々が「貨幣」という「虚」のものに人間が引きつけられるがゆえに経済は成長するし、それがまた経済を不安定化することを感じ取っていたのである。

あれこれ寄り道をしながら、この種の問題にそれなりの答えをだそうとするのに、結局、20年以上もかかったことになる。本書が万全な答えを示しているとはとても思えないけれど、ひとつの方向ぐらいいは指し示したのではないか、と思っている。

(大学院人間・環境学研究科 教授, 現代文明論講座)



332
K
21
吉田南

(配置場所: 1F 教員図書)

都市を冷やすフラクタル日除け

— 面白くなくちゃ科学じゃない —

成山堂書店, 2013年7月

(気象ブックス ; 037)

ISBN: 9784425553617

酒井 敏

SAKAI Satoshi

本を書いてしまいました。私が本を書くなどということは、自分でも想像していませんでした。だいたい、小学生のころから、文章を読んだり書いたりするのは大嫌いで、作文の宿題が出ようものなら、本気で熱を出して寝込んでいた私です。大学に職を得た時も「もしかして、研究者って文筆業?」と大後悔した記憶があります。

後で気が付いたことなのですが、私が文章を書けない理由は二つありました。一つは、私の頭の中には、「文章」を入れておくためのメモリが圧倒的に不足していました。だから、文章全体の構成を考えることができず、最初の3行が書き出せなかったのです。これは、パソコンという文明の利器が解決してくれました。

もう一つは、そもそも、私には「書きたい」ことがなかったのです。読書感想文など、私には意味不明の苦行でした。しかし、曲がりなりにも大学で研究をしていると、自分の考えを人に説明しなければなりません。というわけで、必要に迫られ論文は書けるようになりました。でも、日本語であろうと英語であろうと、私は必要最小限のことしか書かないので、極めて短い論文にしかありませんでしたし、よほどうまくまとまった話でなければ、論文は書きませんでした。

短い論文は書けるようになって、100ページを超えるような「本」は、私にとってとても書けるとは思えない遠い世界でした。それが、2009年の秋、私の恩師の一人である廣田勇先生*1から「本を書かないか」と言われた時、「書いてみようかな」という気になったのです。以前の私なら間違いなく断っていたはずです。

その時、私の中には「書きたいもの」がかなりたまっていました。というより、吐き出せなくて困っていたというほうが正確かもしれません。フラクタル日除けは、思わぬものが、思わぬ形で、思わぬところにつながって、思わぬ結果を生むところが面白く、全体を通してみると実にうまくつながって説得力のある話だと思います。でも、特定分野に限定して論文を書こうと思うと、非常に荒っぽい

話で、しかも「思わぬ」話(常識と違う話)ですから、私の文章力ではどれも論文として成立しませんでした。これは、何か別の作戦を考えなければならない、と思っていた矢先だったのです。

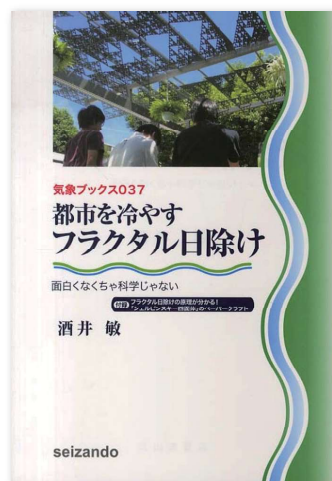
もう一つ、専門家ではなくて、一般の人に訴えたいと思っていたことがありました。それは「世の中そんなにマジメに考えちゃだめですよ」ということです。常識的なことをマジメに考えても「新しいこと」は生まれません。どこかがぶっ壊れていなければ、何かを「発見」することはできないのです。それが、だんだん世の中では許容されなくなってきて、京大の中にいてさえ息苦しさを肌で感じるようになっていました。

といっても、当時は「私の常識」のどこが世間に通用していないのか、私にもよくわかりませんでした。それを整理してくれたのが、東日本大震災と松本総長です。最後の原稿を書いていたのは、国際高等教育院反対、総長辞職要求運動の真っ最中だったのです。

というわけで、この本は筆達者の人が書いたものとはかなり違った味がすると思います。でも、これが、私の頭のなかから絞り出した、そのまんまのフレッシュジュースです。

(大学院人間・環境学研究科 教授、自然環境動態論講座)

*1 京都大学名誉教授、元日本気象学会理事長、
日本地球惑星科学連合フェロー、日本気象学会名誉会員



498.4
T
1
吉田南

(配置場所: 1F 教員図書)

吉田南構内各部局教員及び関係者寄贈図書

(2013年10月1日～2014年9月30日) ※敬称略・五十音順

上梓されましたときはご惠贈くださいますようよろしくお願いいたします。

寄贈者名	書 誌	配置場所	請求記号
人間・環境学研究科			
青山 康高	Reforming Kyoto University : proposals academic and otherwise : drafted in English by 1st year undergraduates in 2013 / compiled on behalf of the students by Yasutaka Aoyama. - [s.n.], 2014. : pbk	2F 洋書	377.216[R]1
阿辻 哲次[4冊]	日本と東アジアの未来を考える：これまでの議論・研究の中間とりまとめ / 日本と東アジアの未来を考える委員会関係委員、奈良県編。 - [奈良県], 2013.	1F 和書	319.1[N]107
	仮名文字と料紙の美：和様文化を味わうために / 名見耶明、高橋裕次著。 - モリサワ, 2014.	1F 和書	811.5[K]4
有元 志保	幻想と怪奇の英文学 / 東雅夫、下楠昌哉責任編集；白井雅美 [ほか] 編集委員。 - 春風社, 2014.	1F 和書	930.2[G]29
伊従 勉	琉球：交差する歴史と文化 / 島村幸一編。 - 勉誠出版, 2014.	1F 教員図書	219.9[R]20
岡田 温司[3冊]	イタリアン・セオリー / 岡田温司著。 - 中央公論新社, 2014. - (中公叢書).	1F 教員図書	137[D]4
	黙示録：イメージの源泉 / 岡田温司著。 - 岩波書店, 2014. - (岩波新書；新赤版 1472).	1F 教員図書	193.8[M]1
岡田 敬司	共生社会への教育学：自律・異文化葛藤・共生 / 岡田敬司著。 - 世織書房, 2014.	1F 教員図書	371.3[K]27
小畑 史子	労働法 / 小畑史子、緒方桂子、竹内(奥野)寿著。 - 有斐閣, 2013. - (有斐閣ストゥディア).	1F 教員図書	366.1[R]79
加藤 幹郎[83冊]	Close to shore : the terrifying shark attacks of 1916 / Michael Capuzzo. - Broadway Books, 2002. : pbk	2F 洋書	487.5[C]1
	Suspended conversations : the afterlife of memory in photographic albums / Martha Langford. - McGill-Queen's University Press, 2001.	2F 洋書	740.2[L]1
金坂 清則[4冊]	新訳日本奥地紀行 / イザベラ・バード [著]；金坂清則訳。 - 平凡社, 2013. - (東洋文庫；840).	1F 教員図書	291[S]31
	中国奥地紀行 / イザベラ・バード著；金坂清則訳；1. 2. - 平凡社, 2013. - (平凡社ライブラリー；802, 805). 1.2	1F 教員図書	292.2[C]89[1]
河崎 靖	「ベルギー」とは何か？：アイデンティティの多層性 / 岩本和子、石部尚登編著。 - 松籟社, 2013.	1F 教員図書	802[D]2
	スイス「ロマンシュ語」入門 / 河崎靖 [ほか] 著。 - 大学書林, 2013.	1F 教員図書	879.9[S]1
川本 徹	荒野のオデュッセイア：西部劇映画論 / 川本徹 [著]。 - みすず書房, 2014.	1F 教員図書	778.2[K]151
栗原 俊秀	デイゴ・レッド / ジョン・ファンテ著；栗原俊秀訳・解説。 - 未知谷, 2014.	1F 教員図書	973[D]2
小木曾 哲	海は百面相 / 京都大学総合博物館企画展「海」実行委員会編。 - 京都通信社, 2013. - (WAKUWAKUときめきサイエンスシリーズ；4).	1F 教員図書	452[U]6
小山 静子	セクシュアリティの戦後史 / 小山静子、赤枝香奈子、今田絵里香編。 - 京都大学学術出版会, 2014. - (変容する親密圏/公共圏；8).	1F 教員図書	367[S]8
齋藤 嘉臣	文化浸透の冷戦史：イギリスのプロパガンダと演劇性 / 齋藤嘉臣著。 - 勁草書房, 2013.	1F 和書	319.3[B]2
佐伯 啓思[3冊]	アダム・スミスの誤算 / 佐伯啓思著。 - 中央公論新社, 2014. - (中公文庫；[さ-66-1]。幻想のグローバル資本主義 / 佐伯啓思著；上).	1F 教員図書	331[G]36[上]
	貨幣と欲望：資本主義の精神解剖学 / 佐伯啓思著。 - 筑摩書房, 2013. - (ちくま学芸文庫；[サ4-2]).	1F 教員図書	332[K]21
酒井 敏	都市を冷やすフラクタル日除け：面白くなくちゃ科学じゃない / 酒井敏著。 - 成山堂書店, 2013. - (気象ブックス；037).	1F 教員図書	498.4[T]1
佐々木 英晃	京大生が書いたイメージでつながる英熟語 / 佐々木英晃著。 - デイスクヴァー・トゥエンティワン, 2014.	1F 教員図書	835.6[K]1
佐々木 幸喜	SENDサマースクールプログラム (チュロンコン大学/ハノイ国家大学) 実施報告書 / 京都大学国際交流推進機構国際交流センター、京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU) 編集。 - 京都大学国際交流推進機構国際交流センター, 2014. - (京都大学アジア研究教育ユニット報告書 = KUASU project report ; 2). 2013年度 (第1回)	1F 和書	377.6[S]6[2]2013
佐藤 義之	「態勢」の哲学：知覚における身体と生 / 佐藤義之著。 - 勁草書房, 2014.	1F 教員図書	141.2[T]1
佐野 宏	読書で豊かな人間性を育む児童サービス論 / 難波博孝、山元隆春、宮本浩治編著。 - 学芸図書, 2012. - (実践図書館情報学シリーズ；4).	1F 教員図書	016.2[D]1
	教師を目指す人のための教育方法・技術論 / 小野賢太郎 [ほか] 編著。 - 学芸図書, 2012.	1F 教員図書	375[K]18
篠原 資明	あいだ/生成 / あいだ哲学学会 [編] = Between/becoming / Society of In-between Philosophy. - あいだ哲学会, 2011. 4(2014)	1F 雑誌	
須田 千里	映像の中の冷戦後世界：ロシア・ドイツ・東欧研究とフィルム・アーカイブ / 高橋和、中村唯史、山崎彰編。 - 山形大学出版会, 2013. - ((山形国際ドキュメンタリー映画祭フィルムライブラリー・セレクション；第3集).	1F 和書	778.7[E]6
高谷 修	シェイクスピア：古典文学と対話する劇作家 / 小林潤司著。 - 松籟社, 2014.	1F 教員図書	932[S]67
	ギリシア・ローマ文学と十八世紀英文学：ドライデンとポープによる翻訳詩の研究 / 高谷修著。 - 世界思想社, 2014.	1F 教員図書	931[C]5
田邊 玲子	皮膚：文学史・身体イメージ境界のディスクール / クラウディア・ベンディーン著；田邊玲子訳。 - 法政大学出版局, 2014.	1F 教員図書	940.2[H]10
辻 正博	大須観音：いま聞かれる、奇跡の文庫 / 名古屋博物館、真福寺大須文庫調査研究会編。 - 大須観音宝生院, 2012.	1F 和書	029.8[D]2
Detlef Koehn	Decoding the Dao : nine lessons in Daoist meditation : a complete & comprehensive guide to Daoist meditation / [Tom Bisio]. - Outskirts Press, Inc., 2013. : pbk	2F 洋書	166.1[B]1
東郷雄二	「特集」時制 / 春木仁孝、東郷雄二編。 - ひつじ書房, 2014. - (フランス語学の最新線；2).	1F 教員図書	850.4[F]5[2]
中西 真知子	再帰性と市場：グローバル市場と再帰的に変化する人間と社会 / 中西真知子著。 - [中京大学経営学部], 2014.	1F 和書	675.2[S]5
西川 完途[18冊]	栽培学 / 手島寅雄著。 - 訂正第3版。 - 養賢堂, 1952. 耕種編	B2 書庫	615[S]5
	Степи: история одной поездки / А.П.Чехов. - Гос. изд-во худож. лит-ры, 1956. - (Массовая серия). : pbk	南棟3 書庫	983[C]7
二條 絵実子	旧家に学ぶ、知恵としきたり：日本の歳時記京都：冷泉家武小路千家杉本家 / 田中昭三編・著；冷泉貴実子、千宗守、杉本秀太郎著。 - 小学館, 2014.	1F 和書	386.1[K]19
前川 玲子[12冊]	亡命知識人たちのアメリカ / 前川玲子著。 - 世界思想社, 2014.	1F 教員図書	361.5[A]14
	Models of misrepresentation : on the fiction of E.L. Doctorow / Christopher D. Morris. - University Press of Mississippi, 1991.	南棟2 書庫	930.28[M]94
松浦 茂	アジア史学論集 / 京都大学大学院人間・環境学研究科松浦茂研究室 [編]。 - 京都大学大学院人間・環境学研究科松浦茂研究室, 2008. 7(2014.3)	1F 雑誌	P1A
	内陸アジア史研究 / 内陸アジア史学会。 - 内陸アジア史学会, 1984. 29(2014.3)	B2 書庫	P1N
元木 泰雄	保元・平治の乱と平氏の栄華 / 元木泰雄編。 - 清文堂出版, 2014. - (中世の人物●京・鎌倉の時代編；第1巻).	1F 教員図書	281[H]12
吉田 忠	近代オランダの確率論と統計学 / 吉田忠著。 - 八潮社, 2014.	1F 和書	350.1[K]8
総合生存学館			
河合 江理子	自分の小さな「鳥カゴ」から飛び立ちなさい：京大キャリア教室で教えるこれからの働き方 / 河合江理子著。 - ダイアモンド社, 2013.	1F 和書	159[U]3
山口 栄一	死ぬまでに学びたい5つの物理学 / 山口栄一著。 - 筑摩書房, 2014. - (筑摩選書；0091).	1F 教員図書	420[S]14
国際高等教育院			
田中 真介	0歳から就学までの目からウロコの保育実践 / 乳幼児保育研究会編著。 - きょうせい, 2009. - (発達がわかれば子どもが見える；[正]).	1F 和書	376.1[H]10[正]

※3冊以上ご寄贈の場合、2冊まで掲載させていただきますのでご了承ください。

知の世界を逍遥せよ！

辻 正博

TSUJI Masahiro

2014年1月下旬、「吉田南総合図書館」の愛称が公募されると知ったとき、大学入学当時の「教養部図書館」時代から多年にわたりその恩恵に浴してきた者のひとりとして、できれば一口応募したいと思いました。ただ菲才の身には、即座に名案を考え出すことができませんでした。

その後、資料調査のため訪れた東京国立博物館の東洋館で、偶然にもすばらしい書跡に出会いました。堂々たる筆跡で「逍遙樓」と大書されたその文字は、8世紀、唐代の中国で活躍した顔真卿の手に成るもので*1、拓本ではありましたが、見る者を圧倒する迫力がありました。

「逍遙樓」の文字を刻した石碑は、現在、桂林（広西チワン族自治区）の七星公園内にありますが、唐代に著名であったのは蒲州（現在の山西省南西部）にあった「逍遙樓」の方で、玄宗皇帝もこの楼閣にのぼり、眼下に広がる黄河の雄大な景色を眺めながら詩を詠んだと伝えられています。



桂林現存 重刻「逍遙樓」碑（撮影：戸崎哲彦氏 1998年）

「逍遙樓」—なかなか良い名前が見つかったと思い、いまだ「募集要項」を見直してみました。すると、図書館側から出された条件（審査基準）に「吉田南総合図書館（現人環・総人図書館）にふさわしい、親しみやすく、覚えやすい愛称であること。吉田南総合図書館の由来である、人間・環境学研究科、総合人間学部、ひいては京都大学の源流である第三高等学校を想起させる愛称であること」とあり、この名前は思いの外、愛称候補として相応しいように思えました。第三高等学校（三高）といえば「紅萌ゆる岡の花」ではじまる「逍遙の歌」を、多くの人が連想するでしょう*2。月の美しい夕べ、吉田山のあたりを彷徨しながら、万里の彼方に思いを馳せる—歌詞はロマンに満ちあふれ、「今逍遙に月白く 静かに照れり吉田山」と歌い上

げて三高の寮歌は終わります。そのようなわけで、私は「逍遙樓」を新図書館の愛称候補として応募することになりました*3。

ところで、「逍遙（逍遙）」とはどのような様子を表すのでしょうか。『広辞苑』（第6版）には、①そこそこをぶらぶらと歩くこと、散歩、②心を俗世間の外に遊ばせること、悠々自適して楽しむこと、とあります。いずれも中国の古典に由来するのですが、（少なくとも私の）図書館での過ごし方を的確に表現しているように思います。特に②の意味は、『莊子』内篇の冒頭、「逍遙遊」に「彷徨乎としてその側に為す無く、逍遙乎としてその下に寝臥す」とあるのが典拠ですが、「とらわれなき心で傍らに憩い、心の赴くままに下に寝そべる」というのは、未来の図書館のひとつのありようを示しているようにも思います。

誤解を避けるために申し上げれば、図書館は単に徘徊するための場所でも、意味なく寝そべるための場所でもありません。大事なことは、心を解き放って自由に「知の世界」を歩き回る（あるいは飛び回る）ことなのです。定期試験やレポートの締切前に参考文献を必死になって探すのも良い勉強になりますが、大学生・大学院生時代の図書館との付き合いがそれだけで終わってしまうのは、いかにも寂しい。京都大学の図書館は、世界に誇ることでできる充実した内容を持ち、傑出した利用者サービスを提供してくれるところです。自力で探し出せない文献があれば、レファレンスサービスに尋ねてみてください。瞬時にあなたの求めに応じてくれることでしょう（私もしばしばお世話になっています）。ただ、時には広大な書架の森の中を彷徨（さまよ）ってみるのも悪くありません。思わぬ発見があるかも知れませんよ。

（大学院人間・環境学研究科 教授、歴史文化社会論講座）

*1 書き手については、異説もあります。戸崎哲彦『桂林唐代石刻の研究』（白帝社、2005年）を参照。本書は吉田南総合図書館にも架蔵されています（B2 書庫 222.3/K6）。

*2 「逍遙の歌」の歌詞は、次のアドレスで見ることができます。
<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/public/issue/binran/documents/2014/090.pdf> (2014.10.27確認)

*3 選考委員会により「逍遙館」と改めた上で、新図書館の愛称に決定されました。

矛盾・問い・共感

小林 哲也

KOBAYASHI Tetsuya

吉田南総合図書館に設置された「グレート・ブックス・ライブラリー」コーナーには、「長きにわたって読み伝えられてきた古典を通して、ものごとを自分で考える力を身に付けてもらうことをコンセプト」に厳選された東西の古典が並べられています。ここから一冊を選んで読書会を行う「グレート・ブックス読書会」企画にこの夏関わらせていただきました。

専門外の読者にも挑戦を許す懐の深さ、見通しの立たない中での読書がもたらす豊かさ、先人の営為・苦闘に連なる喜び——古典読書の宣伝文句としてはこういったものが挙げられるでしょう。7月に行われた初のグレート・ブックス読書会では、こうした文句があながち嘘でないことを私自身の最近の「聖書入門」体験に照らしてお話させていただきました（「空気に流されないための聖書入門」）。二回目、三回目は学生さん主導で行われたアルベール・カミュの『異邦人』読書会にサポート役で参加しています。

私はドイツの文学・思想を専門に研究しており、『聖書』は専門外です。しかも、私は最近にいたるまで＜『聖書』は「宗教」に関わるものである、そして「宗教」は信仰の対象であって研究や思索の対象ではない、哲学の方が知的で、文学の方が心に迫るものだ＞というような考えを漠然ともっておりました。『聖書』は絶対が存在しないこの世界で、絶対の神を信じて救われよう、安心しようとする人が読むのだろうと漠然と思っていました。しかし、実際には、「絶対の神」は人間が行う絶対化を批判するためにあるという側面があります。『聖書』は神という絶対的なものへの信仰を要請する一方で、『創世記』に見られる知恵の実の話がすでに示すように、有限な人間が行う判断や信仰は絶対化し得ないのだということが様々な形で書き込まれています。聖書において神を根拠にして自己絶対化をはかることへの戒めがなされているのだと知って、私はまさに目からウロコが落ち、自らの考えの傲慢さについても大いに反省させられるところがありました。

正反対の見解が矛盾をそのままに並存するような教科書は存在しないでしょう。しかし『聖書』をはじめ、読み継がれてきた古典には、こういった「矛盾」がふんだんに含まれているよ

うに思われます。「古典」は、あらかじめ想定された答えを導き出すために読者に従順なものではなく、読者に問いを強めます。しかし「自分の頭を使う」機会は、自由な余裕の中でなく、むしろ手に負えないものに直面してはじめて生じるものです。

『異邦人』の作者カミュは、答えをためらいながら、常に自分の頭で考えようとした人でした。彼の作品が読み継がれるのは、そこに偉大な答えがあるからではなく、答えを出せない中での苦闘が真摯だったからでしょう。「不条理」をキーワードにして『異邦人』について議論した第二、三回読書会は、参加者それぞれの問いと感性が光る、充実したものとなりました。第二回発表者の藤井遼介君は、『異邦人』の主人公ムルソーと自分の「近さ」と「遠さ」を示し、自分の問いに参加者を巻き込んで議論を進めていました。体験談を語ってときに笑いを起こすとともに参加者の思索を促して、会を盛り上げていました。第三回で発表に加わった濱田明日郎君は、ムルソーへの共感について、それがムルソーの日常生活の描写に由来することも含めて、明解に議論していました。「ムルソーが昼食前の休憩時間に感じる喜び」について語る彼は幸福そうで、その幸福感は参加者の間にまで広がっていたように思います。これらの会を通じて感じたのは、答えが共有されるのではなくとも、問いは共有され得ること、考えに矛盾・対立があっても共感が起こり得るということです（もちろん逆もあります）。そして、読書会という一見地味な場が、自らの了見が揺るがされるスリリングな瞬間、感情の共振する幸福な瞬間が生じる場となり得るのだと、久しぶりに実感しました。参加者に感謝！

（国際高等教育院 非常勤講師）

読書会開催の様子については、当館ブログで報告しています。

グレート・ブックス読書会レポート：「聖書」

<http://yoshidasouthlib.hatenablog.jp/entry/2014/08/22/172758>

グレート・ブックス読書会レポート：「異邦人」全二回+番外編

<http://yoshidasouthlib.hatenablog.jp/entry/2014/09/25/112254>

潜入レポート「異邦人・読書会」

<http://yoshidasouthlib.hatenablog.jp/entry/2014/09/26/113156>

（いずれも2014.10.20確認）

光合成をやめた不思議な植物の生活に迫る

末次 健司

SUETSUGU Kenji

新種のラン科植物を発見された、人間・環境学研究所研究員(発見当時は博士課程に在籍)の末次健司さんに、誌上インタビューをお願いしました。

「タケシマヤツシロラン」の発見は大きく報道されましたが、普段はどのような研究を行っていますか。

皆さんは「植物の特徴を挙げてください」と聞かれた場合、どのように答えるでしょうか。多くの人が、葉緑素を持ち、光合成を行うことを挙げるのではないのでしょうか。しかしながら、植物の中には、光合成能力を失い、菌から全養分を略奪する特異な進化を遂げた菌寄生植物が存在します。私は、この菌寄生植物の不思議さに魅せられ、調査を行ってきました。植物を定義づける大きな特徴が、光合成を行うことですから、菌寄生植物は、いわば「植物をやめた植物」と捉えることができます。私の主な研究テーマは、菌寄生植物が「植物をやめる」過程で、どのような進化を遂げたのかを明らかにすることです。

子どものころから植物や生き物が好きだったと記事で拝見しましたが、研究者になろうと意識されたのはいつ頃でしょうか。

昆虫図鑑で文字を学習したので、ひらがなより先に種名が書いてあるカタカナから先に覚えてくれたり、幼いころから生物が好きでした。ですから研究者がどのような職業かは、当時は正確にはわかっていませんでしたが、物心が付いたころから漠然と研究者になりたいと思っていました。

フィールドワークは、具体的にどのような活動がされているのでしょうか。

菌寄生植物は、開花、結実期以外は地上に姿を現さず、植物体自体が見つかりにくいので、植物相の研究が進んだ日本でさえ、ほとんどの種において正確な分布情報は謎のままです。昔から、菌寄生植物は、その奇妙な形態から、多くの人々の関心を集めてきました。その一方、そもそも研究材料が得難いという性質は、菌寄生植



様々な菌寄生植物たち タヌキノショクダイ(上左)とその根の細胞に取り込まれ、消化される運命にある菌糸(上右)。鮮やかだが自殖するツチアケビの花(下左)と、閉鎖花のみをつけるタケシマヤツシロラン(下右)

物の研究を行うにあたって大きな障壁となっていました。

そこで私は、まずフィールドでの菌寄生植物の徹底的な探索を行っています。そのため春から夏にかけては、ほとんどの時間を、北海道から沖縄まで日本全国のフィールドワーク(時には海外にも調査に行きます)に費やします。研究室で分析してわかることもありますが、野外で「生」の植物を観察しなければわからないこともたくさんありますので、生態を観察するために何日も山中で野宿することもしばしばです。例えば菌寄生植物の花粉を運ぶ昆虫を調べるために、10時間以上じっと菌寄生植物を見つめるといったことも日常茶飯事です。

フィールドワークで印象的な「出会い」などはありましたか？

生物との「出会い」は、日々あります。フィールドに行けば大なり小なり何等かの発見があります。ほぼ必ず、珍しい生物との出会いや、ありふれた生物でもこれまで知られていなかった行動・生態の発見があるので、それだけでフィールドワークの疲れは癒されます。人との「出会い」もフィールドワークでは重要です。フィールドへの探索は全く情報がない状態で行くこともありますが、その地域で活動している植物のアマチュア研究家から、生育地の情報提供をしていただくことや、案内してもらうこともしばしばで

す。またフィールドで初めて出会って交流が続いている人もいます。トップレベルの愛好家の方は、研究者顔負けの情熱と知識を持っている人が多いので、そのような方との出会いも研究の大きな支えとなっています。

「タケシマヤツシロラン」を発見されたときの状況とお気持ちを聞かせてください。

竹島には他のヤツシロラン類の調査のため訪れました。ヤツシロランは私の専門の一つでしたので、おそらく新種だろうというのは見た瞬間にわかりました。植物相に関する調査研究が進んでいる日本においては、被子植物の新種は、1年で数えるほどしか記載されません。しかもそのほとんどが地元で既にその存在が知られていて和名がついているもの、もしくは、これまで知られていた植物が、詳細に検討した結果、複数種に分かれることが判明したかのどちらかです。タケシマヤツシロランのように未知の植物が、未知の自生地とともに見つかるということは非常に珍しいことです。閉鎖花しかつけない特殊な種ということもあり、言葉にならないほどの興奮が全身を駆け抜けたといっても過言ではありません。

「タケシマヤツシロラン」発見の学術的な意義を聞かせてください。

菌寄生植物がどのような制約のもと生育を可能にしているのかを知る良い材料だと思っています。菌寄生植物が稀な存在であることから予想される通り、その生活様式には何らかの不利な点がありそうです。例えば、菌寄生植物の生育場所は、菌類が多く存在する薄暗い林床に限られます。しかしながら暗い林床には、ハナバチなどの花粉の媒介をしてくれる昆虫がほとんどいません。そこで、多くの種が、昆虫が来ないときの保障として自分で受粉する「自殖」を採用しています。なかでもタケシマヤツシロランは、極端な暗所に進出することで花を咲かせることをやめたと考えられます。今後、閉鎖花しかつけない要因の解明ができればと思っています。

（図書館をよくご利用いただいています）フィールドワークと文献調査、どのようなバランスで行ってられますか？

4～11月くらいまではフィールドワークが中心で、フィール

ドに出ている日のほうが、大学にいる日より多いです。京都大学では様々な電子ジャーナルを購読していて、また手続きをすれば京大外からでもアクセスできるのでフィールド期間中でも、夜や電車移動の間に論文を読めるのは有難いです。但し分類学の論文などは、物によると100年以上前のマイナー雑誌に出ている論文にもアクセスしなければならないので、そのような場合は複写依頼にもお世話になっています。そのような訳で、短時間でできる文献調査はフィールド期間中でも行っています。時間のかかる分析や論文執筆は冬にまとめて行うことが多いです。

ご自身の「夢」を教えてください。

まず研究の面では、菌寄生植物を「まるごと」理解することが目標です。このための大きな課題としては、例えば、菌寄生植物が菌への寄生を可能にするメカニズムの解明があります。通常、植物は菌に光合成産物を分け与える見返りに、窒素やリンを菌から受け取っています。菌根共生と呼ばれるこの関係には、お互いが良いパートナーかどうかを見分ける仕組みが存在します。つまり生涯にわたり菌に寄生するためには、菌側の「審査」を欺く必要があると考えられます。現在、細胞生物学者や分子生物学者との協力体制を築き、この課題に取り組もうとしています。

また私の研究対象の多くは、深い森に生息する稀な植物です。専門性を活かし、これらの植物の保護活動を少しでも手助けしたいと思っています。しかし保全のための活動として、実際に現場で実践する方々の活動に勝るものはありません。そこで私は、科学的な根拠に基づく保全方法について、地元の方々にわかりやすく伝え、実践できるよう努めています。また保護活動の現場で経験則的に行われている保全活動は、科学的な視点から考えても合理的であり、研究者にとっても参考になる部分も多く存在します。実際の保全活動の現場における経験則に基づいて行われてきた「おそらく正しい」保全活動に対しては、科学的な根拠を与えることで、保全活動に尽力されている方々の一助となれるよう努めています。

どうもありがとうございました。研究への、そして植物の保全活動への情熱が伝わってきました。今後ますますのご活躍をお祈りしております。

（大学院人間・環境学研究科研究員 日本学術振興会特別研究員）

平成25年度 特別図書

教育研究に必要な基本資料を整備するため、人間・環境学研究科の教員が選定した高額資料です。

※配置場所はKULINEをご覧ください

資料名・編著者等	内 容
婦人世界(マイクロ) (近代文芸・文化雑誌マイクロ版複製双書) 第5-6回配本(1928.1～1933.5, 全21リール)	1906(明治39)年から1933(昭和8)年まで刊行された、女性の地位向上を目的とした、啓蒙的な総合雑誌。文芸雑誌としても知られ、充実した内容と、長期間にわたって刊行された点において、近代日本女性史研究の重要な、不可欠の史料。 (平成24年度に第1-4回配本を購入済)
Le Débat : histoire, politique, société (ISSN: 0246-2346) 47(1987)-175(2013)	フランスの伝統ある出版社ガリマール社が隔月で発行する論壇誌のバックナンバー。1980年の創刊以来現代フランスのさまざまな論点について多くの知識人が執筆しつづけている。とくに80年以降の公教育(共和国の教育)のあり方について与えた影響は大きい。(一部欠号あり)
Athena Library of English Studies 6パート25冊(全11パート46冊中)	18～19世紀イギリスの社会生活、文化、女性史等に関する貴重な史料。
ebrary生物言語学関連コレクション(電子ブック) 26タイトル(買い切り、シングルユーザ)	生物言語学は言語に対する生物学的研究として近年注目される学際的先端領域であるが、文献資料的にはまだ乏しく本学の所蔵資料はこの分野での遅れが目立つ。生物言語学に関する基本文献をオンライン版で利用できるようにしたもので、活用範囲も広いコレクション。
フランスの移民関連文献コレクション 全68冊	2000年以降に刊行された、フランスの移民に関する社会学、言語教育学、政治学、歴史学などを横断するコレクションであり、フランス研究、移民研究、言語教育学研究を進める上で重要な文献。
ebrary英語教育関連コレクション(電子ブック) 9タイトル(買い切り、シングルユーザ)	外国語教育(英語教育)における最近の指導法、理論を取り扱った本学の図書館に書籍では所蔵のないコレクション。ebraryは統一されたプラットフォームで、電子書籍ならではの閲覧、編集機能を有しており、利用価値が高い。
満州国政府公報(マイクロ) 政府公報 584-1536号 リール番号: 33-68(36リール)	「満州国」政府の「官報」。日本が「満州国」政府をとおして実行しようとした政策や統治を明らかにする上で有用な資料。後半部分が所蔵(平成23年度に1537-3329号を購入済)されていたが、今回の購入によりさらに日本史研究・中国史研究・植民地研究・国際関係論研究へ役立つことが期待される。
The library of essays on equality and anti-discrimination law / edited by Suzanne B. Goldberg 6 vols <均等・非差別法制研究集成>	6巻からなる本シリーズは、平等・非差別に関する法律、特に年令、障害、性別、人種、宗教、セクシャリティに関する均等法関連の論文を集大成したもの。各トピックをカバーする古典から入手困難な論文を含んでおり、非差別法制を扱う院生、学生、教員に必須の資料。
世界のドキュメンタリーシリーズ他 DVD 13タイトル	日本の農山村を対象にして人びとの生活や儀礼の様子を民俗史的な観点もふまえて記録された作品、ドキュメンタリーや海外での援助活動に関わる商業化された映像作品など良質な映像記録のコレクション。
Repertorium Columbianum 13 vols	コロンブスの航海以降の16世紀における新旧両世界の交流に関する史料集。オリジナル言語によるテキストとその現代英語訳・序論・解説・注釈付きで、研究用のみならず、演習の報告や卒業論文の準備にも有用。
都新聞(復刻版) 明治期 第6回配本(明治32年) 計6冊	明治～昭和にわたる「東京新聞」の前身となる新聞で、特に芸能関係が充実している。
英國國家圖書館藏敦煌遺書: 漢文部分 / 方廣錫, (英)吳芳思主編; 上海師範大學, 英國國家圖書館合編. 广西师范大学出版社 第2輯(11-20冊)	大英図書館(The British Library)に所蔵される、20世紀初頭に英国の探検家スタインが敦煌莫高窟より持ち帰った古写本・古文書「敦煌文書(敦煌遺書)」の図録。その学術的価値は歴史・文学・哲学思想の各方面において極めて高い。 (平成24年度に第1輯(1-10冊)を購入済)
Atalanta(復刻版) 全6巻(12冊)	英国ヴィクトリア朝後期に発行された、女性自身の文化とキャリアの向上を志向した少女向け月刊誌の復刻版。女子教育研究、ヴィクトリア朝文学研究の有意義な資料。
The Reception of British and Irish Authors in Europe 既刊18冊のうち、13冊	英国の作家や思想家のヨーロッパ大陸での受容を論ずるシリーズ。18世紀以降の英国を代表する作家・思想家のヨーロッパ大陸における影響や受容に関して、知見を深めることができる。また年表や書誌情報も充実しており有益である。

グレート・ブックスコーナーのご紹介

2014年4月、当館1階にグレート・ブックスコーナーを設置しました。「将来、地球社会のリーダーとして社会のビジョンを描いていく人材となる京大生には、学生時代においてこそ、古典といわれるような長きにわたって読み継がれてきた書物に触れ、自らの力で物事を考える力を身に付けてほしい。」との総長の考えから、学部1、2回生の利用が多い当館に、世界の古典を整備したものです。



1階グレート・ブックスコーナー

蔵書構成

西洋古典(思想)	150冊
西洋古典(社会科学)	64冊
西洋古典(文学)	158冊
日本の古典(思想)	58冊
日本の古典(文学)	107冊
自然科学(世界)	90冊
自然科学(日本)	16冊
東洋古典	92冊
合 計	735冊

関連企画

コーナー設置にともない、学部学生の方々にグレート・ブックスに親しんでいただけるよう、さまざまな企画を実施しました。いずれも1、2回生にも参加しやすい入門的な内容で開催し、好評を得ています。グレート・ブックスに親しんでもらえるよう、これからも工夫を凝らしていく予定です。どうぞお気軽にご利用・ご参加ください。



「聖書」読書会(6月27日開催)

(1) グレート・ブックス読書会

当館グレート・ブックスコーナーに所蔵する図書を利用した読書会を募集し、当館で実施をサポートしました。下記の読書会が環onで開催されました。

- 第1回「聖書」読書会：6月27日開催 主催：小林哲也氏(国際高等教育院非常勤講師)27名参加
- 第2回「異邦人」読書会：7月29日開催 主催：小林哲也氏(国際高等教育院非常勤講師)13名参加(主催者含む)参加者のうち、学生(4回生1名)がコーディネーターを務めた。
- 第3回「異邦人」読書会：9月1日開催 主催：小林哲也氏(国際高等教育院非常勤講師)8名参加(主催者含む)参加者のうち、学生(1回生、4回生各1名)がコーディネーターを務めた。



「子規になりきる! 百万遍句会」(10月23日開催)

(2) 古典紹介の研究会「グレート・ブックスと私」

学部学生に古典作品に親しむ機会を提供するため、グレート・ブックスコーナーの古典と研究を織り交ぜた古典紹介の研究会を企画し、下記の会を環onで開催しました。

- 第1回「子規になりきる! 百万遍句会」：10月23日開催
講師：佐藤文香氏(俳人)、佐々木幸喜氏(京都大学アジア研究教育ユニット[国際交流センター]特定助教)16名参加



生協学生書評委員会「綴葉」による
ポップ展示(6-8月)

(3) ポップ展示

古典作品を手取る手がかりとなるよう、グレート・ブックスを紹介するポップを作成、現物と共に展示しました。ポップ作成にあたり、生協学生書評委員会にご協力いただきました。

- 生協学生書評委員会発行の書評誌「綴葉」の紹介文によるポップ 10点(6～8月展示)
- 当館公式ツイッター(@yoshidasouthlib)での紹介文によるポップ 10点(9～11月展示)

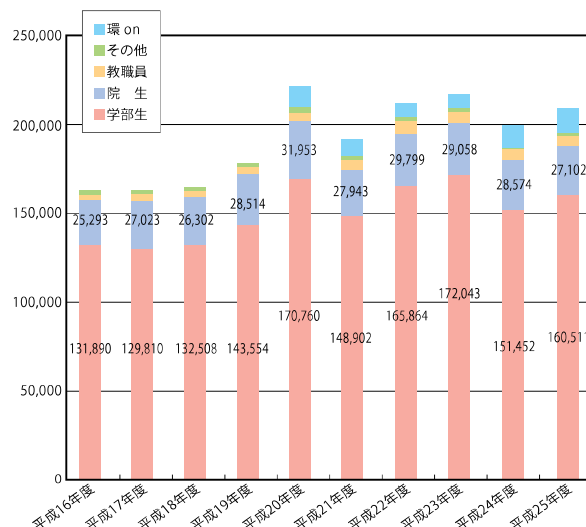
図書館統計

蔵書冊数 (平成26年3月末現在)	利用対象者数 (平成26年5月1日現在)	
660,804冊	全学共通教育学生(1・2回生)	5,723人
(和書) 363,828冊	総合人間学部学生	587人
(洋書) 296,976冊	人間環境学研究科学生	630人
	教職員	907人

平成25(2013)年度 入館・貸出

	入館者数	貸出冊数
学部生	160,511人	49,907冊 (56.4%)
院 生	27,102人	29,732冊 (33.6%)
教職員	5,657人	7,128冊 (8.1%)
その他	3,626人	1,646冊 (1.9%)
新聞閲覧室等※	26,628人	
環on	12,932人	
計	236,456人	88,413冊 (100%)

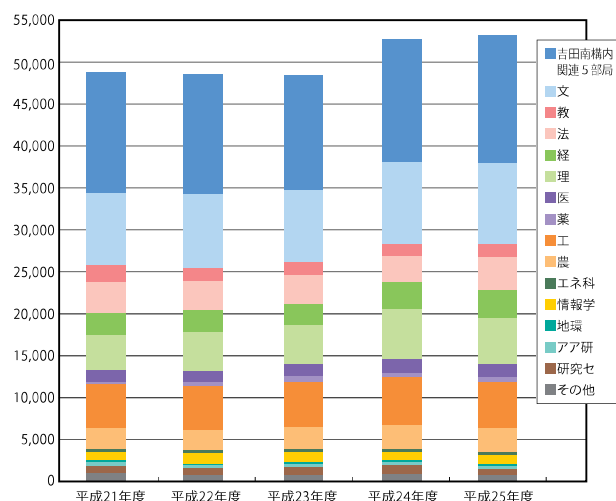
※入館システムを通らない利用のため、身分不明



入館者数の推移

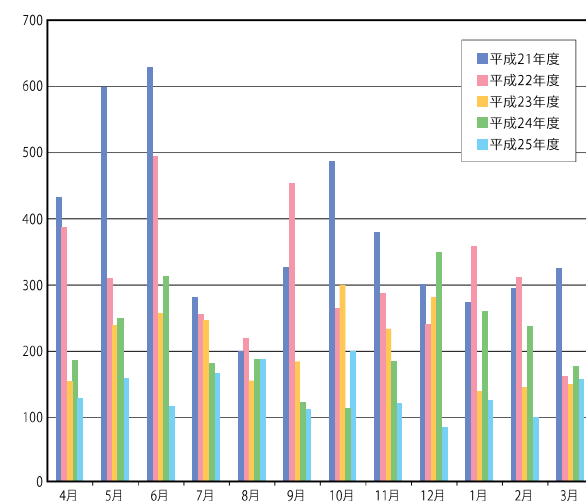
(平成16年度～平成25年度)

※入館システムを通らない利用者は含まない



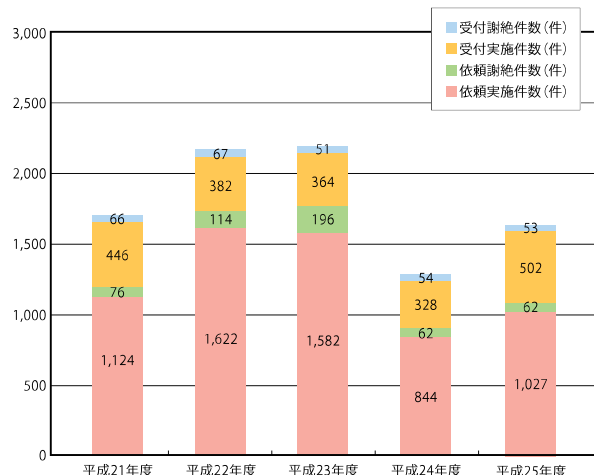
部局別貸出人数の推移

(平成21年度～平成25年度)



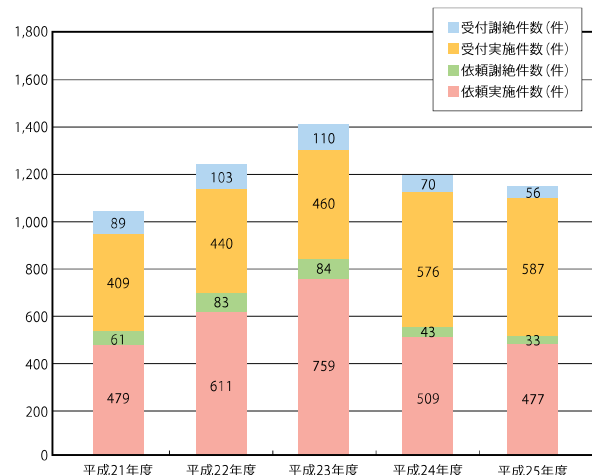
magazineplus検索回数

(平成21年度～平成25年度)



文献複写処理件数の推移

(平成21年度～平成25年度)



現物貸借処理件数の推移

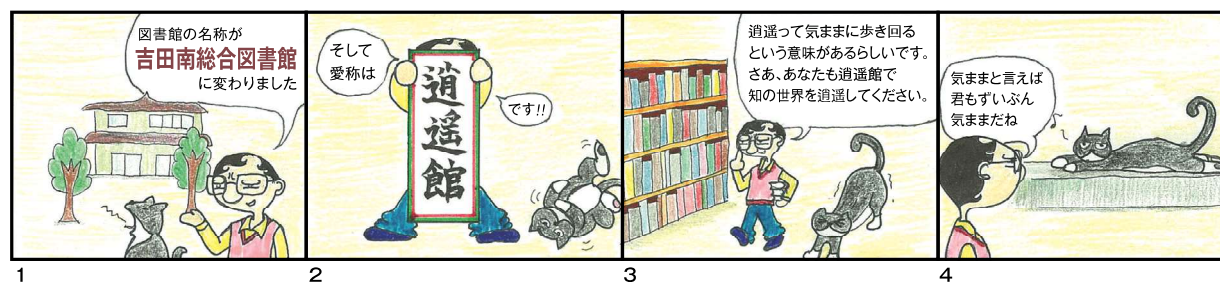
(平成21年度～平成25年度)

貸出回数ランキング

期間：2013年10月1日～2014年9月30日

順位	貸出回数	簡略書誌情報
1	1066	地球の歩き方 / 地球の歩き方編集室著作編集 -- ダイアモンド・ビッグ社.
2	56	Frühneuhochdeutsches Wörterbuch / herausgegeben von Robert R. Anderson, Ulrich Goebel, Oskar Reichmann ; Bd. 1, Lfg. 1. A-abfal - Bd. 11, Lfg. 1. st-stosser. -- W. de Gruyter, 1986.
3	53	TOEICテスト新公式問題集 / Educational Testing Service 著 ; 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会編 ; [Vol. 1] - Vol. 5. -- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会, 2005.
4	49	西谷啓治著作集 / 西谷啓治著 ; 第1巻 - 第26巻. -- 創文社, 1986.
5	47	定本久生十蘭全集 / 久生十蘭著 ; 1 - 別巻. -- 国書刊行会, 2008.
6	45	上撰の旅. -- 1. 札幌・道東・道北 - 33. 沖縄. -- 昭文社, 1999-2001.
7	42	アトキンス物理化学 / Peter Atkins, Julio de Paula 著 ; 千原秀昭, 中村亘男訳 ; 上, 下. -- 第8版. -- 東京化学同人, 2009.
8	41	新TOEICテストスーパートレーニング / 木村哲也, クリストファー・ペルトン, 水嶋いづみ著. -- 文法・語彙問題編 - 実戦活用例文555. -- 研究社, 2007.
9	35	九鬼周造全集 / 九鬼周造著. -- 第1巻 - 別巻. -- 岩波書店, 1980.
10	34	解析入門 / 杉浦光夫著 ; 1, 2. -- 東京大学出版会, 1980. -- (基礎数学 ; 2-3).
11	31	文部科学省後援実用フランス語技能検定試験公式問題集 / フランス語教育振興協会編. -- 2007年度1級 - 2012年度5級. -- フランス語教育振興協会, 2007.
12	30	業界と職種がわかる本 : 就活の基本 : 自分に合った業界・職種をみつこう! / 岸健二編 ; [2006年版] - '15年版. -- 成美堂出版, 2003.
13	28	解きまくれ!リスニングドリル TOEIC TEST / イイクワン著. -- part 1&2, part 3&4. -- スリーエーネットワーク, 2010. -- (イイクワンの Step by Step 講座).
14	27	電磁気学 / J. D. ジャクソン著 ; 西田稔訳. -- 上, 下. -- 吉岡書店, 2002. -- (物理学叢書 / 小谷正雄 [ほか] 編 ; 90, 92).
14	27	アトキンス物理化学 / P.W. Atkins 著 ; 千原秀昭, 中村亘男訳. -- 上, 下. -- 第6版. -- 東京化学同人, 2001.
15	26	岩波講座日本通史 / 朝尾直弘 [ほか] 編. -- 第2巻 - 別巻4. -- 岩波書店, 1993.
16	25	TOEIC Test「正解」が見える新・実戦模試 / キム・デギョン著 ; 樋口謙一郎訳. -- 講談社インターナショナル, 2008.
16	25	解析入門 / 松坂和夫著. -- 1 - 6. -- 岩波書店, 1997.
16	25	海辺のカフカ / 村上春樹 [著]. -- 上, 下. -- 新潮社, 2002.9.
16	25	電磁気学 / ファインマン, レイトン, サンズ [著] ; 宮島龍興訳 ; 新装. -- 岩波書店, 1986. -- (ファインマン物理学 / ファインマン, レイトン, サンズ [著] ; 3).
16	25	20世紀とは何だったのか : 「西欧近代」の帰結 / 佐伯啓思著. -- PHP研究所, 2004.6. -- (PHP新書 ; 301 . 現代文明論 ; 下).

●吉田南総合図書館物語



本誌名『かりん』は、図書館前の樹木、カリンに由来します。

【表紙】 図版『都名所圖會 卷之三：左青龍』当館蔵 <535|||14||三高和>



かりん：京都大学吉田南総合図書館報

Karin : Kyoto University
Yoshida-South Library Bulletin

発行 2014年12月1日 (年1回)

編集・発行 京都大学吉田南総合図書館
Yoshida-South Library, Kyoto University

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

TEL: 075-753-6524, 6525

FAX: 075-753-6896

Yoshida-Nihonmatsu, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501

<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/yoshidasouthlib/>

E-mail : eturan61@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

Twitter : <https://twitter.com/yoshidasouthlib/>